

お香とお能

白洲正子

出典『日本の名随筆87能』所収
観世栄夫編・作品社
400字詰原稿用紙30枚

香道は、茶道と切っても切れぬつながりがあることは、いまさらいうもおろかです。そしてお能とは一見赤の他人のような顔をしながらも姉妹のようなもので、いたるところに共通点が見出せます。

嗅覚は人間の五官のなかでもっとも原始的で低級なものであるそうです。そのためか、かおりには一般性があつて古今東西を問わずよい匂いを好かない人はおりません。万人むきであるためにかおりはよい商売にはなりましたが、芸術的なものとして発達したのはおそらくわが国においてのみでありましょう。万人に感じることできるかおりというものは、平凡で単純でわかりやすいのです。そのかおりのなかから日本人だけが「純粋なかおり」を引き出すことをしました。

原始的な嗅覚がするどいということは、犬やその他の獣を思わせませす。人間が犬とちがうのは匂いのなかから純粋な美しさが引き出せることだけです。原始的なものなかに美しさを感じえる私たち現代人は、それゆえに原始民族が下等であるときめつけることはできません。原

始的であるなしにかかわらず、美を見出す、そのことだけがよろこびであるのです。

ものにジカにふれる意味において、香りほど直接なものはありません。体験のほかに知りようもないからです。日本の香道もひとつの道であるからには、かずかずの法がつねにつきまといまいます。その点お能と同じほどの約束があるにはありますが、とどのつまり何をするかと言えば、「木片を火にくべる瞬間に芸術が成り立つ」それだけのことです。お香の場合芸術そのものは形も色も音もないものによつて表現されます。お香ほど抽象的なものはありません。

抽象的なかおりの芸術をつくるうえに必要とする材料は、香木と火とあるのみです。香木はけつして目をよろこばせるに足るものではありません。火も日常私たちが見なれたものです。その見た目にはなんの感興もそそらないふたつのものが合するところにかおりの芸術は発生いたします。そしてその存在は鼻で嗅ぐよりほかに知るすべもありません。

香道は根本において香木と火とそれから人間の三つで成立するのでありますから、ひじょうに単純であるために完全をはかりやすいのです。その点お能は複雑であります。舞台芸術であるかぎりどこまでも人間あいであるからです。人間はいろいろな人の目をあざむくものからです、なかなか信用がおけません。すこしでも人間をマシに見せるためにあらゆる点で美化しなければならぬからです。そのかぎりたてた外觀が人目を見せるためにあらゆる点で美化が必要です。しかしじつはお能も香道と同じほど単純なのです。そして同じく三つのものしか必要としていません。

お能におけるシテは香木であります。

シテ以外の部分は火であります。

お能のシテが、シテを助ける背後のものとしてピタリと一致するとき、お能のかおりができてくるのです。その息もつけぬ微妙な瞬間は、芸術の歴史的一場面であります。

香木や火はありのままの自然の物ですから目をあざむきません。そのまま信用できるのです。しかしお能の舞台における人々とても実際においてすこしも香木や火と異なるものではありません。外観にあざむかれてもその事実が信用できないのは観客が悪いのです。お能の演者はみなありのままの自然の姿で、——すなわち裸一貫で演じているのです。人間は着物を着ているから、物を言うから、頭で考えるから、人間以外の物とちがうのではありません。着物を着、物を言い、頭で考えながら、木や火と同じ物になりえるのが人間であります。そしてお能の演者はそのことをはつきり証明するものです。舞台の上で美しい装束や種々の約束にとりかこまれながら、ハダカであることは、心なき自然の物と寸分のちがいもありません。そのように目をあざむく部分を無視することはすなわちお能の芸術に「ジカに触れる」ことです。かおりが直接体験であるようにお能もまた身にふれることができます。お能がかもしだすふんいきは、香のかおりのそれと似ているどころか同じものなのです。それを言いあらわすには別のことばはあつても、意味はただ一つありません。

お能における人間は(見物をもふくむ)「自然と対立する人」ではなくありのままの自然です。みながみな人間であるために複雑にみえますが、一見複雑にみえるのは、かおりに達する道が香道よりも多いただけであつて、直接であることにけつして変わりはありません。それゆえにお能のうえのどの道をとろうとも目的地にいたる距離はみな同じなのです。

その複雑性が総合芸術とされるゆえんでもあります。そう言いますとかならず、香もまた総合芸術である、と逆襲をうけると思います。なるほど香道には複雑きわまりない美しい道具類があります。香木の種類も何百あるかわかりません。香木の組み合わせかたも複雑です。しかしお雛さまの道具のような美しい器具類は情趣をそえますが、直接香の芸術のためにはなんの役めもいたしません。道具を並べることが香道でも茶道でもありません。それらはなくと

も純粹なかおりは十分にあげられます。あまたの香木はひとつひとつのちがうかおりを内にもつことによつてお能の演者にひとしいものです。また香の組み合わせかたも二百数十種の多きにのぼるようですが、これも同じく二百数十番のお能の曲にひとしいものとみることができません。

香はけつしてカグとは言いません。いつも「香は聞く」ものであります。それには「問うて答をまつ」意味があるそうです。お能もその意味でまさしく「問うて聞くもの」です。(どうぞ、謡を聞くではありませんことを……)

見物は好ましいひとつのかおりを聞くためにお能をみるのです。そしてお能は妙なるかおりを発散して見物に答えます。同時に見物にも問いかけます。

「この『羽衣』のかおりはお気に召しますか？」と。その「羽衣」のかおりをかぐことのできた人だけがその間に答えられるのです。この問答は演者と見物の対立の間に行なわれるのではなくありません。この問答はいわば、お能のひとりごとであります。

かおりはお能全体にもあるとともに、そのなかのどの一部分にも存在します。芥川龍之介氏はそれを足に見出して、「能の足ほどふしぎに美しいものはない」と言いました。その足は足袋をはいていない足です。足袋どころか、皮も、肉も、骨も、色もない、世にも美しいアシなのです。

香道には香合じょうあわせと言つてくさくさの香を薫たいてその香を聞きあてるあそびがあります。香の上手は百発百中であります。そしてその答は証明できるのです。お能を知る人の答もまた百発百中ではありますが、それを具体的に証明するものではありません。究極の意味で証明できるのは、自分自身だけです。これ以上たしかな証明はありません。そこに個人を超越した大きなよろこ

びがあるのです。

香合はあそびにすぎません。香合の競技にふけるところには、たのしみはあつてもよろこびはありません。おおぜいのなかであろうとも、香はひとりで聞くものです。お能もひとりです。この場合ひとりというのは個人ではありません。個人をはなれた人間、人間イコール自然という意味です。それゆえに純粹な芸術、すなわちかおりというものは個人の所有物ではなく万人のものとなります。小さな会合の世界から外に歩み出るのがこれら芸術の使命であります。

香木が薫くとなくなるように、火も炭が灰となると同時に消えるように、ひとつのお能が一、二時間で永久に終わってしまうように、人間も無になりえる性質をもっております。香木が他の木片とちがうことは、かおりを内にもつからです。そして香木の「内なるかおり」は「特殊の炭火」と合して目に見えぬ「ひとつのかおり」として外にあらわれます。

そのひとつのかおりを、ある名称のもとに、(たとえば「白菊」とか「紫舟」とか「初音」とか)はつきりと聞きわけける人もまた特殊な人間であります。なぜならば、生きながらにしてかおりと化しえる人間だからです。それ以外に香を聞く手段はありません。香の上手はわれ知らずその瞬間に香りと一体になっているのです。その場合まぐれあたりはひとつもありません。またそうなれる特殊な人間にとつてまちがえることはありません。

香のひとつひとつのかおりには名称があるのですからあきらかに証明することができます。しかし名称は説明ではありません。かおりの説明は人間にはつけられません。それをしいてつけたものに香道の「五味」といわれるものがあります。甘、苦、辛、酸、鹹かんの五つで同じく体験のほかに知ることをえない味覚にとつてあります。人は便宜上かりにそのことばを用いるのです。そしてかりに用いられるそのことばは、特殊な人間の間にのみ通用するものです。こと

ばのかわりに歌がおかれる場合もあります。あるひとつの香は、「きくたびにめづらしければほととぎすいつも初音のここ地こそすれ」とかおるゆえに、「初音」と名づけられました。ある香は、「世のわざのうきを身につむ紫舟はたかぬさきよりこがれこそすれ」ですから、「紫舟」とよばれます。

お能の「松風」の説明は金春禅竹によつて、つぎのようにされました。

「松風」の曲は、…：「秋の夕ぐれの如し」

もしほくむ海士のとま屋のしるべかは

うらみてぞ吹く秋の初風

神風や伊勢の浜荻折しきて

旅ねやすらん荒きはまべに

極端に言えば「松風」のお能は見ないでもこれだけであじわえます。

お能でもお香でも自分の全能力をひとつところに集中できるのが特殊な人間であつて、けつしてその専門用語に精通する人のことではありません。そこには手にふれるものも、目に見えるものも、耳に聞こえるものもありません。あるのは鼻でかぐ、ことのできないかおりだけです。

お香は推古天皇の御代に淡路に漂着した沈じんをもつてはじめとします。正倉院にある「らんじやたい」がその伝説の主です。お香が芸術化して一般にさかんとなったのは、お能とほぼ時代を同じくします。香道は足利義政が奨励し、志野宗信によつて創設されました。（平安朝の文学にしばしば語られるそらだきとか薰物かきものとか言われるものは、香木でなくて煉香です）

お能の世阿弥の位置にある志野宗信は純粋なかおりを香木の内から引き出した最初の人であ

ります。というのは、香木は何千あるともみな大きく六つの種類に分類されるとかぎわけた天才であるのです。六つの種は六国とも六木とも言われます。それは伽羅、羅国、真那加、真南蛮、佐曾羅、寸門多羅と名付けられます。キャラ、スモタラはすぐ想像が付きませんが、マナカとはマラッカのことでありましょうか？ いずれ南の国の名であるに違いないのですが、この六種がそれぞれがうぐらいをもつことは、お能が五つのちがう味をもつことに相当いたします。それは六歌仙にかたどつて、つぎのようにわけられることもあります。

伽 羅 羅 苦 品位高く優にして苦味を主とす。高尚なる事雲上人の如し、故に僧正遍昭とす。

羅 国 辛 薫り鋭く苦味を帯びて白檀の如き処あり。凜然たる武士に似たり。業平の表面女色を装へど内心の壮志を抱けるに比すべし。

真 那 加 鹹 薫り軽く艶にして早く香の失するを良しとす。少し癖ありて愁を含める女に似たれば小野とす。

真 南 蛮 甘 甘味を主とす。他に劣りて卑しき処あり。故に山賤の花蔭に休らへる黒主に適すべし。

寸 門 多 羅 酸 酸味を主とす。品位優ならず。いはば商人のよき衣着たりとやいはむ。故に此を康秀と見たつべし。

佐 曾 羅 酸 番気冷やかにして酸上品なるは伽羅に紛ふ処あり。高尚なれば高僧の部として喜撰に擬す。

この六種の五味だけを完全に自分のものとすれば、あとはおのずから何百何千の香でも聞きわけられるとのことです。私にはその訓練はありませんが、以上たしかなことばを信用すれば、お能はそのままそのかおりのもとにわけることができます。すなわち、優美で品のよい伽羅は

かつらもの、白檀りんぜんのように凜然としたかおりをもつ羅国は修羅能、うれいをふくんだ真那加は狂女物、やや品のおちる真南蛮は他の四番目物、もつとも優美でない寸門多羅は切能、ひややかにすがすがしい佐曾羅は脇能と。

この五味はお能における序破急と同じく、香全体に通じてあるとともに、ひとつひとつの香のすみずみにまでおよぶ香道のグランマーでもあります。このことはもつとくわしくたしかめたいと思いましたが、これは例の「秘伝」であるそうで、めんどろなのでよしました。また門外漢が知っても益のないことです。なぜその秘伝のハシを私が知っているかと言えば、それは娘時代になくなった私の母が毎日のように香を聞いていたからです。たとえば「××ははじめ辛にたち、甘にたつて苦に終わる」というように、香のひとつひとつの五味のたつ順序を聞きわけていたのを子供の時にそばで聞きかじっていたのです。

そのように伽羅のなかのひとつをとつても、けっしていつも「苦のかおり」のなかにじつとしていることはありません。序のお能が終始序に止まっているのではないように、かおりもしじゅう変化するのです。私の想像では、おそらく苦のなかにも五味があり、またそのなかのひとつひとつにも五味がさらに発見されるというようにきりなく追及されるのではないかと思えます。

お能の名人は名香のように、妙なるかおりをもつ人々であります。そして伽羅であるべきお能にはいつでも自分のなかから伽羅のかおりを発散させることができます。いろいろのかおりをたくわえている「香のもと」にもひとしい人です。それゆえに自由に二百数十番のお能のかおりに変化することができます。世阿弥が言った「まことの花」の意味はここにも読みとれます。

「花ト申スモ万ノ草木ニ於テ何レカ四季折節ノ時ノ花ノ外ニ珍シキ花ノアルベキ。ソノ如クニ習覚エツル品々ヲ究メヌレバ、時折節ノ当世ヲ心得テ時ノ人ノ好ミノ品ニヨリテソノ風体ヲ取出ス、コレ時ノ花ノ咲クヲ見ンガ如シ、花ト申スモ去年咲キシ種ナリ」

「ソノ上、人ノ好ミモ色々ニシテ、音曲、振舞、物真似所々ニ変リテトリドリナレバ、何レノ風体ヲモ残シテハ叶フマジキナリ。然レバ物ノ数ヲ究メツクシタランシテハ初春ノ梅ヨリ秋ノ菊ノ花ノ咲キハツルマデ一年中ノ花ノ種ヲ持チタランガ如シ」

「物数ヲ究メテ工夫ヲツクシテ後花ノ失セヌ所ヲバ知ルベシトアルハコノ口伝也。サレバ花トテ別ニナキモノ也」

このようにしじゅう変わるために芸のうえに個性をもつことはできなくなります。したがってお能にははつきりしたはまり役というものはありません。

世阿弥の「花トテ別ニナキモノ也」はよいことばです。かおりをもととする香の芸術でもつまるところにあるかおりは、鼻でかぐものではありません。お能の最後には、「何もない」のです。その何もないところが、もつとも美しいのであります。それゆえにお能はどの一部分をとつても、どのひとつの道からはいつても最後は透明体となるのです。

さいわい世阿弥はそのことについて『遊楽習道見風書』のなかでのべています。いろいろむずかしいことばが使つてあつてわかりにくいので、能勢氏の解説にたよつてぬき書きをしてみます。

水晶といふ物は誠に清浄体で色もアヤもない空体であるが、そのなかから火を生じ水を生ずる。ある歌に、

桜木はくだきみてれば花もなし

花こそ春の空に咲きけれ

といふのがある。くだいてみれば何もない桜の中から美しい花や実を生ずるが如く、又水晶といふ空体の中から火水を生ずるが如く、能の各種各様の体にわたり広く様々のあらはれを皆一身にかねて持つ達人は正に「器」といふべきである。

四季折々の時節に従つて、花葉、雲月、山海、草木生物、無生物に至るまで万物をうみだす所の「器」は天地である。

万物をうみだす器が天地である如く、廣大無風な空に身をおく事をもつてみづから「器」とならねばならない。

というわけでお能は水晶体であるのです。またそれだけでなくどうして静止の状態にありながら万のもの、万の動きを表現することができましょう。世阿弥はそのことを演者の側から説明したのでありますが、それはそのまま鑑賞家のことです。お能の舞台に花や月や人として現われるものの奥には「何もない」のです。その何もないところに至るまでお能はどこからみても、型、型、型でうずめられています。たべてしまふ最後の瞬間までお菓子も型のかたちをしているように。またともかくもたべてみないことにはお菓子のおいしさもわからないように。

香道のなかの組香と称されるものは、透明なかおりを彩るあそびであります。材を物語や歌や詩にえることはお能と変わるものではありません。組香というのはいろいろの香木をまぜて一組とし、順序不同にとりまぜて炷たき、そのかおりを聞きあてる競争です。聞香もんこうのうえに変化をもとめ風流な趣を加えることによつて、いちだんの興味をそえるのでありますが、つまるところは賭けごとにはすぎません。うまれつき賭けごとを好む人間の興味をそえる一種の手段であります。

組香におけるよほど以前の私のおさない経験のべます。それはもしかすると私の最初にして最後の聞香の経験となるかも知れません。そのおりは五人ずつ二組に別れて香を聞き、その名をあてた人数の多いほうの組が勝つという優美なゲームのなかのひとつでした。

まず「一の香」が私の前におかれました。これは「こころみ」といって、その香のかおりをおぼえればよいのです。その香を聞いたとたんに私が思ったことは、「誓願寺」というお能のなかの、

「笙歌^{せいが}はるかに聞ゆ孤雲の上なれや」

の一節でした。そして「一の香」は、かつてに「セイガンジ」と名づけてはつきりおぼえることができました。

「二の香」は前のとほとんど区別がつかないほど似ていましたが、やや後口がおとるような気がしたのと、いかにものんびりとした感じがありましたので、かりにお能の「東北^{とうほく}」と名づけておきました。

「三の香」は前の二つとはまったくちがうかおりを持っていました。品も落ちると、男性的な感じがしたので、すぐ「土車」の名をあてえました。お能の「土車」は男物狂の能であります。

以上の三種の香を順序不同にうちまぜて三度ずつ、つごう九回まわし、なかにひとつ「客」と称して「こころみ」に聞かなかった香をひとつ入れて全部で十回まわして聞くわけです。

さて一巡「こころみ」が終わるとゲームにとりかかります。いよいよ私の番がきましたので聞きますとそれはあきらかに「誓願寺」でしたので「一の香」という札を香元にさし出しました。つぎは「東北」すなわち「二の香」でした、つぎはまた「誓願寺」そのつぎは「土車」と、おもしろいほどみなあたるのです。

このゲームがすんだあとで聞きますと、私の「誓願寺」は「小倉山」と名づける伽羅でありました。二の「東北」は「春の浜」、三の「土車」は「峰の松」という、すくなくとも感じは似ている名まえをもつ香であることを知りました。私はひどく興味をおぼえて横目でかすかすの他の香の名まえをぬすみ見ました。母の所有であった美しいタトウの包のなかには、「羽衣」、「花筐」、「楊貴妃」などの親しみ深い名まえがおりかさなっていました。お能のそれらの曲とはたして「同じかおり」をもつものかためしたくてたまりませんでした。また「源氏物語」の名をもつ香は、あの巻のひとつひとつを髣髴ほうふつとさせるのでしょうか？ 私はかならずそうにちがいないと信じております。世阿弥が『源氏物語』のなかに詩を感じ、それをそのままお能のなかに盛ったように。

なんでも物には俗にビギナス・ラックというものがあつて、生まれてはじめてあつたものにはかえつていいかげんの経験をもつより成功することがあります。なぜならば、知識をもたないために直感にたよるよりほかないからです。人間の知識が発達するにつれてにぶくなった直感は、人が知識にたよれない場合にかぎり潑刺とよみがえるものです。私にとつてはこれがうまれて初めて香を聞く機会であつたことが成功させたのであつて、けつしてじまんのできることではありません。

茶道も香道も本来が舞台芸術などよりもつと直接に自由をめざすはずであるにもかかわらず、現在のありさまでは四畳半とじを出るものではありません。それは真の自由をえるために型がある、その型にみずから虜とらとなつていくからです。ことに香道は十二単衣みたいな衣装をもつてかざられ、わずかに几帳のかげでかすかに匂つている感があります。その平安朝趣味はたしかに「いい趣味」にはちがいませんけれども、いささか実行のともなわない理想にかたむくきらいがあります。しかもその奥にはもつともつと美しいものがひそんでいるのです。こと

にかおりというものは「無から有を生じる」そのことをもつともよく教えるものでもあります。きれいな道具類を仲介とすることに異存をはさむ者ではありませんが、香道の目的がかおりにあてて競争にあるとされているのは、くやしいことです。

優美で繊細なものとはもすれば懦弱に流れやすいのは平安末期の退廃がもつともよくものがあります。香道や茶道とほぼ同じ時代に完成されたお能も、古代の貴人をまんどくさせるにふさわしい優美さを増すために、材のとり方は懐古趣味に墮しています。全面的に平安朝趣味をみなぎらせているその外見にくらべて、実際には男の力を必要とするつよさが、お能を今まで保ったといえましょう。武士の文化がつくつたお能は貴族趣味とはいえませんが、そうかといって江戸時代の町人芸術でもありません。現代のお能はまったく昭和の私たちのものなのであります。

お能のもつそのつよさはまことに「巖に花の咲く」つよさであります。それを私たちがあじわえるのは、そのつよさを実現することのできる専門家がまだ幾人か存在しているからです。そのわずかな人たちがいなくなったら、なんとしてもお能は優美なあそびにすぎないことをつくづく思います。「香を聞く」ように彼らは舞台の上からしじゅう私たちに話しかけます。一時間ないし二時間のはかない命に生きる人々が心の底から言うことは、

「お能は終わってもお能は終わらない」

「お能というものは、

男が演じるものではなく、

また男がいろいろのものに扮して演じるのではなく、お能は舞台の上に演じるものではない」

「あらゆる意味でお能から型をぬきとつたら何もなくなる」

「ひとつのお能には全能力を用いることを必要とする。ゆえに見物も全能力を働かさなくてはならない。お能の全能力とは、お能の力である。」六百年を生き通した歴史である。

「お能は空中に浮いているユメをえがきはしない。

ユメは、——技術を必要としない幽玄、

お能は、——技術をもととする幽玄」

「お能のシテはみずから芸術作品であるから、芸術家ではない。芸術家になる必要もない。」などと。

名香の一片にもひとしいお能の名人がたまたまあらわす芸の極致ともいわれるお能の演出は言語に絶します。天下第一品の芸というものは私にとつてそれはほんとうにひとつしかありません。そのことについて一度書いてはみましたが、私にのついに沈黙をまもるよりほかありませんでした。物心のつく前から千番ぐらいみたお能のなかでただ一度そのような演出にめぐりあう機会を得たのは幸福であります。なぜならばお能というものは何月何日の何時にだれによつて演じられるときまっていますから、能楽師はきまつた日時にきまつたひとつの能をいやでも

応でも演じなくてはならないからです。見物もまたそうです。一生見つづけても運が悪ければそれほどの芸にふれる機会は恵まれないかもしれませぬ。はかない舞台芸術はみる人を待つこととはしませんから。

「美しい」ということばをもつてそのお能の美しさはあらわせませぬ。「どこがよかった」などと考えるひまもありません。とりもなおさず言語に絶したのであります。その感激はその場かぎりのものではなく、日がたてばたつほど深さを増し、新しさを増します。そのシテの名も、そのお能の曲も、その演能の月も日も、なにかも考えたくないほどの気がいたします。

それまでわかつたつもりでいたお能が、またなんというわからないものであるかということも知りました。それは理解を絶するほどの神秘的な美しさをもつていたからです。その美しさは二時間で私の目の前から永久に消えうせました。しかしそのお能は永遠に消えることのない光を私に、——いや、この世のなかに残しました。思えば長い命を保つ絵画や彫刻や文学は永久に存在するかのように見えますが、いつかは無に帰するにきまつています。千数百年の長い年月美しく光りかがやいていた法隆寺の壁画のくずれる日も遠くないことを聞くとき、ことさらその感を深くいたします。そしてはてしもないもののはじめと終わりを考えるとき、千年も二時間も大差はないことを知ります。